【第18回ユーラシア研究会報告　2020年１月31日発表要旨】

ポスト・ポスト社会主義時代の日露考古学―石刃鏃文化再考

福田正宏

北海道のアイヌ文化成立史に特異性が認められる理由のひとつとして、サハリン－大陸方面からの「外来文化」の到来があったと、古くから指摘されてきた。北海道が大陸から切り離された完新世に、外来文化が北方から二度到来したとされる。縄文時代早期の石刃鏃文化と紀元後５～９世紀のオホーツク文化である。前者は8200年前の寒冷化という環境要因、後者は黒水靺鞨（女真）の東方展開という政治経済的要因と関係していると評されることが多い。

石刃鏃文化の石器技術は石刃技法である。この技術は列島縄文的ではなく、大陸内部シベリアの遺跡にあるため、戦前に旧石器時代との関係、東西冷戦期に大陸内部との関係性が指摘されてきた。にもかかわらず、最近まで、鏃の形状が類似すること以外、不明な点が多かった。

大陸－北海道間の交流・接触の通過点となるアムール流域やサハリン島では、冷戦時代も発掘調査が進められていた。しかし1991年にソ連が崩壊して新生ロシアが誕生するまで、十分な根拠をもとに文化交流の有無を論じることは叶わなかった。1990年代になり、ロシアと日本など元西側諸国との現地共同調査が可能になった。とはいえ、都市部以外での野外調査を要する考古学では、現地調査に入る前も入った後も、研究面とは別の不都合や困難が多かった。この時代をポスト社会主義期と呼ぶ。2000年代後半になると、ロシア国内事情が様変わりし、国際化や情報化が進んだ。ポスト「ポスト社会主義期」とも呼べる時代に入り、日露両国において相互参加型の現地調査を実施できるようになった。今はSNSを通じて両国間で調査成果を即座に共有することのできる時代である。

ポスト社会主義期以降、発表者はロシア現地での発掘調査を主導してきた。石刃鏃文化に関しては、アムール中・下流域やサハリン島の、縄文時代早期に並行する完新世初頭の遺跡で数多くの発掘をしてきた。北海道では石刃鏃文化の代表的遺跡である湧別市川遺跡などで発掘調査を実施し、日露でその成果を公開してきた。

石刃鏃文化の遺跡は道東を中心に多く分布するが、南千島にも関連遺跡がある。ここでは最近、ロシア側の遺跡調査が進んでおり、この文化の全体像を知る上で欠かせない結果が次々と報告されている。国境問題があるので、他の地域と同じ手法による現地調査は実践できていないが、これまで培ってきた学術交流の延長線上で議論を進めている。石刃鏃文化の盛衰については、次のように説明するのが適している。

8200年前の世界的な寒冷化事件への適応戦略として、サハリンから石刃技法の技術導入がなされた。それにともない、最初期に道東に集団の南下があった可能性がある。ただし、石刃鏃石器群をともなう遺跡の大半では在地系の縄文土器が用いられており、集落形態も墓制もそして植物利用も、在地の伝統に連なるものである。それらの遺跡は最寒冷期ではなく、その直後の気候回復期にある可能性が高い。再温暖化にともない不必要となりはじめた北方系の石刃技法は徐々に放棄された。つまり、石刃鏃文化は外来文化というよりは、縄文集団の北方適応形態のひとつであると考えるべきである。

（Fukuda Masahiro 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授）

横浜ユーラシア文化館　第８号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 8

2020年３月31日発行

編集　横浜ユーラシア文化館
〒231-0021　横浜市中区日本大通12
Tel.045-663-2424　Fax.045-663-2453
www.eurasia.city.yokohama.jp/
発行　公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
印刷製本　朝日オフセット印刷株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures
12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan
Published by the Yokohama Historical Foundation
Printed in Japan by Asahi Offset printing Co., Ltd.
©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2019
ISSN 2187-7734